

[翻 訳]

『スペクテイター』(12)

——第106号から第115号——

門 田 俊 夫

第106号 1711年7月2日(月曜日)

【アディソン】

ここでは閑静な田舎の良さを称えるために、
その豊饒なさまをあなた方にたっぷりお見せしよう。

(ホラティウス)¹⁾

友人のサー・ロジャー・ド・カヴァリから田舎に行って1ヶ月ほど暮らさないかと何度となく誘われていましたので、先週、彼に同行しました。そして、彼のカントリーハウスにしばらく滞在しながら、今後の思索について構想を練ることにしました。私の気質を熟知しているサー・ロジャーは、寝起きの時間も私の好きにさせてくれ、食事も彼と一緒にとろうが、部屋で一人でとろうが私の自由に使ってくれます。そしてまた、彼は私のやることに何一つ口を差し挟まず、そっとしておいてくれます。屋敷に地方の紳士たちが訪ねて来ても、私とは距離を置いてくれます。私が野原を散歩しているとき、客人たちが垣根越しに私の方を盗み見しているのが分かりました。すると彼は、私がじろじろ見つめられるのが嫌いなことを知っていますので、客人たちに私のことは無視して欲しいと言っているのが耳に入りました。

1) ホラティウス『頌詩』1.7.14-16.

サー・ロジャー家の人々は真面目で謹厳な人たちの集まりですので、私はここにいると非常にくつろぎます。サー・ロジャーはこの上なく素晴らしい主人ですので、召使の異動はほとんどありません。彼は周囲の人たちみんなから愛されていますので、召使は誰もが彼の元を去ろうとしない訳です。このため、奉公人たちは全員永年勤続者で、主人とともに齢を重ねています。彼の身の回りの世話をする従者は、彼の兄に見えます。執事は白髪頭で、馬丁はまれに見る謹厳な人物で、御者は枢密顧問官のような風貌をしています。老犬や、ここ数年役に立たなくなっていますが、これまでのお務めに対して大切に面倒が見られている厩舎の老馬にまでもサー・ロジャーの善良さが伝わっています。

友人がカントリーハウスに到着したときに老奉公人たちの顔に浮かんだ嬉しそうな表情を、私は非常に喜ばしく思いました。老主人の顔を見て涙を流す人もいました。みんな我勝ちに用事を仰せつかりとうします。そして、何も用事が無いと分かるのがっかりするのです。父親であり同時に家長でもあるこの善良なサー・ロジャーは彼らに用事を言い付けるときには、彼ら自身のことに関する質問を適度に挟むのでした。こういった慈愛に満ちた優しい気質を備える彼はみんなから慕われます。そこで、彼が誰かと陽気に過ごしているときには、彼が話し掛けている人物は言うまでもなく、一家の者全員が上機嫌になります。これに反して、彼が咳き込んだり何か老齢から来る身体の不調をうっかり見せてしまうと、召使たちの表情には直ぐに心ひそかに心配している様子が認められます。

友人は執事に私の世話を任せました。他の召使もそうですが、とても配慮の行き届く執事は心から私を満足させようとうしました。というのも、主人から何度も私は特別の友人だと聞かされていたからです。

サー・ロジャーが森や野原に出掛けているときに、もっぱら私の話し相手となるのは非常に徳のある人物です。この人物は終始サー・ロジャーと生活を共にしており、礼拝堂付き牧師といった資格でこの屋敷で暮らし始めて30年以上になります。この紳士は生活が非常に規則的で、振舞いは丁重で、良

識と学識を備えた人物です。彼は心からサー・ロジャーを愛し、尊敬しています。そこで、彼の一家での暮らしぶりは、従者というよりはむしろ親族といった感じがします。

友人のサー・ロジャーは優れた教養を身につけている一方で若干風変わりな人物であること、また、欠陥も美德もある種の放縦さを漂わせており、そのことが彼の個性となり、際立った存在になっていることはこれまで本紙で何度か触れたことがあります。この気質は一般にそれ自体極めて罪のないものですので、振舞いはとても感じのよいものとなり、分別や美德は通常よりもずっと魅力的なものに思えてきます。昨晚、彼と一緒に散歩していたとき、彼は牧師のことをどう思うかと尋ねました。そして、彼は私の返事を待たずに、会食の席でラテン語やギリシャ語のことで恥をかかされるのを心配しているのだよ、だから大学では彼は学識のある人物というよりも物の道理が分かり、考え方がよく、明晰な声の持ち主で、社交的で、できるならバックギャモンにも少し通じている牧師を特別な友人として見つけ出したのだと言いました。²⁾友人として必要な諸々の資質が備わっている上に、本人は見せはしないものの優れた学者でもあるこの紳士を見つけ出してくれたのも友人だったのだとサー・ロジャーは語ります。さらに彼はつぎのように語りました。彼には教区の聖職禄を授け、彼の値打ちが分かっているので生涯に渡って十分な年金を与えることにした。かりに彼の方が自分よりも長生きするのであれば、彼はおそらく現在よりもっと尊敬されることになる。彼と生活を共にして今年で30年になる。彼は私があることに気づいているのを分かっているが、この間、彼は毎日のように教区民である私の店子の誰そのために何とかして欲しいと要請はするが、自分のためには私に何一つ依頼したことはない。彼がこの地に来てからはこの教区では一度も裁判沙汰は起っていない。かりに何か争いが起っても、みんなは彼にその裁定を委ねるのです。もし万一彼の判断に満足しない場合は、そんなことはあってもせいぜい一、二

2) バックギャモンは第77号にも登場する。スウィフトは1711年8月23日付けのステラの手紙でディロン・アッシュとこのゲームをしたと書いている。

度のことだが、そのとき初めて私に訴えてくるのです。彼が初めて私の元へやって来たとき、私は彼に英語で活字になっている立派な説教集をプレゼントして、日曜日ごとにその中からひとつずつみんなに説教して欲しいと要請した。この求めに応じて彼は説教集を自然な流れになるように整理し、実践キリスト教の一連の体系を作り上げているのです。

サー・ロジャーが話を続けているとき、私たちが話題にしている紳士が近づいて来ました。(今日は土曜の夜でしたが) サー・ロジャーが彼に明日はどなたが説教するのですかと尋ねると、午前はセント・アサフ主教³⁾で、午後はサウス博士⁴⁾ですとの返事がありました。そして一年間の説教者のリストを見せてくれました。その中には、実践キリスト教についての論文を発表している著者数名のほかに、大変喜ばしいことに、ティロットソン大主教⁵⁾やサンダースン主教⁶⁾、パロウ博士⁷⁾やカラミー博士⁸⁾の名前が挙がっていました。私は説教壇にいるこの牧師さんを見るとすぐに、考え方のよさと明晰な声と

3) ウィリアム・フリートウッド (1656-1723) のこと。この人物はホウィッグ党支持の著名な主教で、アン女王にも気に入られていたが、1708年からセント・アサフ主教を務めていた。セント・ダンスタンズ・イン・ザ・ウェストでウィンザー聖堂参事会員として非常に評判をとった牧師。

4) ロバート・サウス博士 (1634-1716) のこと。この人物はチャールズ2世時代に人気があった機知に富んだ牧師。『タトラー』紙第205号、211号にも登場する。

5) 第103号参照。

6) リンカーン主教ロバート・サンダースン (1587-1663) のこと。この人物については、無抵抗、消極的服従というお気に入りのテーマでトーリーがしばしば引用した。

7) アイザック・パロウ博士 (1630-77) のこと。この人物は、数学、神学の分野で顕著な業績を残した。

8) モーレイはこの人物を著名な長老教会派の聖職者エドマンド・カラミーとみている。ここで挙がっている牧師はおそらくセント・ポールの名誉参事会員であり、英国国教会を強力に擁護したエドマンドの次男ベンジャミン・カラミー (1642-86) のことであろう。英国人名辞典によると、この人物は存命中に法話を7編出版したが、死後の1690年に彼の法話集が出版されたということである。

いう資質を執拗に求めていたサー・ロジャーの主張がもっともなことだったのだと思いました。彼の法話もさることながら、私は彼の奥ゆかしい容姿や説教の仕方に魅了されましたので、満ち足りた時間を過ごすことになりました。こんな風にして再現される説教は、あたかも優美な役者の口から発せられる詩のようなものなのです。

私は心底、地方の牧師の多くがこのお手本にならって欲しいものと願っています。独自の説教を考え出すことに苦心するのではなく、優れた大家が文字にしたものを説くのに相応しい堂々とした語り口と才能を磨いて欲しいものと願う次第です。⁹⁾ そうした方が牧師のみなさんにとっても気分は楽になり、同時に人々にとってもはるかにためになるのです。

第107号 1711年7月3日（火曜日）

【スティール】

アテネの人たちはイソップを追慕して
立派な彫像を建てた。さらに、
みんなが崇めるように台座に奴隷を配した。(フェイドロス)¹⁾

地方で経験したもてなし、伺候のマナー、そして掻き乱されることのない自由と静寂さに包まれて暮らしていると、よく見られる召使のマナーの墮落は主人の行状のせいなのだという常々私が抱いていた考えは間違いではなかったのだとの思いを強くしています。²⁾ 一家全員の顔には満ち足りた表情が浮かんでいますので、一人一人には家族の一員であることの幸せが分かっているものと思われます。サー・ロジャー家以外ではめったに見かけること

9) 『タトラー』紙第57号参照。18世紀には、法話の朗読は、特に地方の教会でかなり一般的だったようである。

1) フェイドロス『寓話』第2巻、結びの言葉1～3。

2) スティールは第88号と第96号でも扱った問題をこの号でも展開し、理想的な主従関係について述べている。

のないことがひとつあります。他の屋敷では召使が主人を避けて逃げ回っているのが普通ですが、サー・ロジャーの屋敷では、召使は巧妙に主人のいるところへ姿を見せ、主人が姿を見せると、呼び付けなくてもいわば視察を迎え入れるかのように直ちに両側に居並ぶ訳です。これは思いやりに溢れた公明正大な主人の気性のなせるわざなのです。この主人はまた広大な地所の切り盛りの仕方を十二分に承知しています。このため、彼の心は掻き乱されることはなく、気難しい表情を浮かべることもなく、周りの人たちに激情に駆られた理不尽な命令を出すこともありません。従って、敬意と敬愛の情を一身に集め、この家の召使たちが機嫌良く務めを果たしているのがことのほか印象的です。召使は主人に呼ばれる場合、一般に主人と召使の関係によく見られる何か些細な失策を叱られるといったことを考える必要はなく、また、解雇されるかも知れないと脅える必要もありませんし、不穏当な言葉を浴びせ掛けられることもありません。だが、指示を受けて迅速にやってくるにはどの道を取るべきか、素通りしたのはどの地所か、店子のお年寄りの体の調子やそのお年寄りにご機嫌伺いをしたかどうかといったことはきちんと掌握しておかなくてはなりません。

博愛精神から、召使のことを心に留めている人物は、一家の主人というよりむしろ王様のような暮らしぶりとなります。命令は務めというよりは引立てと受け止められ、お近づきになれることは職務を果たしたことへのご褒美となるのです。

一家の切り盛りで私の友人が長じている点がもうひとつあります。それは召使への褒美の与え方です。彼は常々、自分が脱ぎ捨てた衣服を従者に与えることは従者に悪影響を及ぼし、もっぱら外面的な事柄に影響を受ける人物の場合は、主人と召使の間に対等であるといった奇妙な感覚を生み出してしまふのだという意見を持っています。私は友人がしばしば愉快そうに、若い紳士が一、二ヶ月前には自分がとても気に入っていたコートを着ている召使を罵倒しているのだと言っているのを聞いたことがあります。彼はさらに愉快そうに、この種の気前の良いご婦人方について話すのでした。彼が言うに

は、お手伝いに褒美を出す場合には似合う服を、罰を与える場合には不似合いの服を与えるさるご婦人を知っているということです。

ところで、善良な私の友人は召使に褒美を与える場合には、自分の衣服を与えるようなことはしないで、その代わりにお金を少々与えるのです。そうすることで、将来的には召使をやめるかどうか選択の余地を与えてやる訳です。以前に述べましたように、友人は儉約家としては申し分のない人で、金銭は現世の枢要徳³⁾であることを十分承知しています。つまり、彼は儉約することによって気前良くなれるのだということを承知していますので、店子が没落するとしばしば多額の負担金を免除してやったり、その財産を社交界入りを考えている善良な召使に与えたり、召使がそのまま召使として留まる場合には、彼がもっと快適な生活が出来るように負担金は彼のものとする事が出来るのです。

信義を重んじると同時に寛大でもある人物は、どんなに善良な人物であっても、自分の意志を持たないのは惨めなことだと考えます。そこで、彼は召使には出来るだけ早く独立した生計を立てさせるようにします。サー・ロジャーの地所の大半は、彼自身あるいは彼の先祖に仕えていた人物が借り主となっています。店子たちがサー・ロジャーの帰省を歓迎するために各地からかけつけてくるのを目にするのは実に気持のよい光景でした。彼の元にやって来た元召使と屋敷に留まっている召使で私の気づいた違いというのは、後者つまり屋敷に留まっている召使の方が立派な紳士であり、立派な廷臣に見えたということでした。

私の考えでは、このように召使の身分から解放され、生計を立てる手だてを見つけているということは、ひとえに善良な召使であるからなのですが、そのことが後任の召使に、前任者をお手本にして、勤勉で慎ましくしなくてはならないという気持ちにさせるのでしょうか。こういった人たちの心の狭さに

3) 枢要徳とは、古代哲学では、正義、思慮、節制、堅忍不拔の四徳目であるが、しばしばこれに神学的な信仰、希望、慈善の三つの徳を加えた七徳目のことをいう。

はどこか不思議な点があり、相手を満足させ、寛大さを欠いてしまうところがあります。

この場合、いつの世でも貴顕の士は召使のお陰をこうむっており、身代が窮境にさしかかったときに召使は主人のために英雄的に尽したのだと詳しく語ることが出来るでしょう。また、零落した主人に両者の間を隔てていたのは財産だったのだと示すことも出来るでしょう。だが、この思索で私が意図している点はひとえに感謝の気持を持たない主人に心優しい忠告をすることですので、よくある出来事に絞り、サー・ロジャー家とあと一、二の屋敷でしかお目にかかったことがないのですが、一般に善良な召使はそれ相当の扱いを受けているのだと言っておきたいと思います。サー・ロジャーの優しさは召使の孫にまで及びます。今朝方も、サー・ロジャーは御者の孫を徒弟に出してあげました。彼の屋敷のギャラリーには一見に値する絵画が数多くありますが、本日の紙面はギャラリーに飾られている一枚の絵の話で締めくくりたいと思います。

この立派なギャラリーのつきあたりに、一人が裸で、もう一人がお仕着せを着た二人の若者が川の中に突っ立っている絵がありました。支えられている方の人物は死に掛かったようでしたが、顔には生気が蘇っており、この上ない悦びの表情と愛情を浮かべて相手方を見つめていました。私は卒倒しかかった人物は友人のサー・ロジャーに似ていると思い、傍にいた執事に尋ねてみました。すると執事が、お仕着せを着ている人物はサー・ロジャーの召使で、岸辺で主人が泳いでいるのを見守っていたのだが、主人が突然具合が悪くなって水中に沈むのを見て、川に飛び込んで助けたところなのだと説明してくれました。執事はさらにつぎのような説明をしてくれました。サー・ロジャーは自宅に帰るとすぐに、それ以来サー・ロジャーはそうなのですが、大層気前良く、その召使の職を解いて、屋敷に来る途中遠くに見えていた素敵な領地の主人にしてあげたのです。確かに私はサー・ロジャーが何も詳しいことは言わずに、あそこにはとても恩義を感じている立派な紳士が住んでいるのだと言っていたのを思い出しました。私とその絵のある箇所を少々不

満気な様子で見ていると、それはサー・ロジャーの意向に反したのだが、この紳士のたつての希望で主人を助けたときの衣服の姿で描かれているのだと執事が教えてくれました。

第108号 1711年7月4日（水曜日）

【アディソン】

大きくあえぎ、息を切らしながら、
何でもないことで大騒ぎをする。(フェイドロス)¹⁾

昨日の朝サー・ロジャーと屋敷の前を散歩していましたが、地元の人が大きな魚を持ってやって来ました。彼の話によると、魚はウィリアム・ウィンブル²⁾さんが今朝方獲って来たのですが、サー・ロジャーさんに差し上げて欲しい、一緒に食べたいということでした。同時に手紙がついていました。サー・ロジャーは使いのものが去ると直ぐに私にその手紙を読んで聞かせました。

サー・ロジャー殿

このサケは今年最高の獲物です。どうかお納め下さい。一週間ほどお邪魔し、ブラック・リバーでスズキを釣ってみたいと思います。この前ローンボウリング場で貴殿にお会いしたとき、少し気にかかったのですが、貴殿の御者のむちは使い物にならなくなっていたようです。先週こしらえたものを6本持参します。貴殿が田舎に滞在なさる間使って戴ければ幸いです。先週一週間は忙しくしていました。サー・ジョンの長男とイートンに行っていたのです。彼は猛勉強を始めています。

1) フェイドロス『寓話』第2巻, 5.3.

2) 1741年7月2日にダブリンで亡くなったトマス・モアクラフトという人物だとされている。この人物のライフスタイルは旧家の次男、三男に見られるひとつの典型。

敬具

ウィル・ウィンブル

この型破りの手紙と伝言を知って、私はこの手紙の主の人となりになり大層好奇心をそそられました。その結果、つぎのようなことが判明しました。ウィル・ウィンブルはウィンブル家という旧家の末裔で、准男爵の弟ということです。年格好は40歳から50歳の間で、仕事に就かず、相続財産も無く、大体長兄の元で猟場管理人をしながら暮らしています。犬の群れの扱いはその地方では彼に抜きでるものではなく、野ウサギを見つけ出す腕前はたいしたものです。暇人のやる手仕事はどんなことにでも精通しています。毛ばりは驚くほど見事に作りますし、その地方で使用される釣竿もすべて彼が作ります。彼は人の善いお節介やきで、おまけに家柄のお陰で非常に大事にされています。つまり、彼はどの家に行っても歓迎される客人で、周囲の紳士たち全員と良好な関係を保っている訳です。彼は時によってはポケットにチューリップの球根³⁾を忍ばせていたり、遠く離れて暮らしている知り合い同士の小犬の交換を取り持ったりもします。ウィルは若い跡取りたちみんなからとても気に入られています。彼らはたびたび彼に綱を編んでもらったり、犬の訓練でお世話になっている訳です。時には、彼は跡取りの母親や姉妹に彼が編んだガーターをプレゼントしたりします。そして、顔を会わせるたびに、ガーターの着け心地は如何ですかと尋ねては彼女たちを笑わせます。こういった紳士らしい物作りをする世話好きな気性のウィルは、その地方のアイドル的存在となっています。

サー・ロジャーが引き続き彼の人となりについて喋っているときに、当の本人が近づいて来ました。彼はやって来る途中にサー・ロジャー家の森で折ってきたハシバミの枝を2、3本手にしていました。私は一方にサー・ロジ

3) 17世紀末に見られたチューリップ熱がまだ諷刺の対象となっている。チューリップは16世紀にトルコからヨーロッパに伝えられ、17世紀にはオランダで熱狂的に受け入れられた。

ヤーの心のこもった歓迎ぶり、他方に善良な老勲爵士をみとめて期せずして表している客人の得も言えぬ喜びの表情を観察して、大層満ち足りた感じを持ちました。ひとしきり挨拶が終わると、ウィルは1マイルほど離れた所にいるある婦人の元に小箱に入れて持参した羽子を届けたいので召使を一人貸して欲しいと頼みました。半年前からプレゼントすると約束していたようです。サー・ロジャーが背を向けると直ぐに、誠実なウィルは私に向かって、近くの森で大きな雄キジを隠れ場から飛び立たせた話とかその他同種の珍しい話を喋りだしました。風変わりでめったにお目にかかれない人物に出会うことは私にとって大きな楽しみです、私に話し掛けている人物の珍しい体験談は、彼が命懸けでキジを追いかけることに満足しているように、私にとっても非常に満足のゆくものでした。そこで、私はいつになく熱心に彼の話に聞き入りました。

彼が喋っている最中に、正餐を知らせるベルが鳴りました。この紳士は彼が釣りあげた大きなサケが非常に見事に調理されてメインディッシュとして食卓に供されるのを見て満足しました。彼はその料理を前にして、食べ終わるまで終始、サケが釣針に食いついたときの様子を、つまり、泳がせ、騙し合いをし、やっと河岸に引き揚げた様子をことこまかに喋り続けました。つぎは野カモの料理でしたが、正餐が終わるまで彼の一人舞台でした。食卓での最後の話は最近ウズラ笛の改良をしたという話題でした。

食事が済んで部屋に帰ったとき、私は先程食事を共にした誠実な紳士に対して心ひそかに共感を寄せました。これほど善良で、これほど多忙な人物がもっぱら取るに足らないことに精力を費やしていること、つまり、他人にこれほど親切にしてもそれほど報われないし、どんなに多忙を極めても少しも自分のためにならないことが、私には非常に気にかかった訳です。もし彼が別の持ち場を与えられて、これだけ打ち込んでいたら、みんなから尊重され、出世していたのは間違いのないところです。つまり、商人になっていれば、彼のありきたりではあるが実用的な資質は無駄にはならなかったのです。

ウィル・ウィンブルのケースは、旧家の次、三男によく見られるものです。

子供たちに品位にかかわる商いという職業に就かせるぐらいなら、紳士として貧に甘んじた方がよいと考える旧家があります。こういった気質があるために、誇りと貧窮に見舞われている例がヨーロッパの随所に伺えます。次、三男が教養がなくてもまた知的職業に就いていなくても、長男と張り合っていける暮らしが出来る可能性があるのは、我が国のような商業国の幸せです。その結果、次、三男の中には、実社会に出たときは貧しくても、刻苦勉励によって長兄よりも資産家になる人たちが出て来ます。あり得ないことではないのですが、ウィルは若い頃、神学、法学ないしは医学の道を目指しましたが、その方面には向いていないと分かって、両親は最終的には彼の好きにさせたのです。ところで、彼がこの種の学問には向いていなかったとしても、商業という職業には最適だったのは確かなことだったのです。この点は何度繰り返してもいい点だと考えますので、読者のみなさんには是非本紙と第21号とを比べて見て欲しいものと思います。

第109号 1711年7月5日（木曜日）

【スティール】

学校には通曉していない。(ホラティウス)¹⁾

今朝ギャラリーの中を歩いていますと、向かい側からサー・ロジャーが入って来て、「ド・カヴァリ家の親族が見守る中でお会いできて嬉しく思います。どうかあなた同様に寡黙な人たちとの対話を存分に楽しんで下さい。」と話し掛けてきました。彼が絵のことを言っているのが分かりました。彼は先祖のことを自慢するような人物ではありませんので、私は彼から絵の説明があるのを期待しました。ギャラリーの突き当たりまで来たとき、この老勲爵士は一枚の絵の前に立ち止まりました。そしてその絵を前にして、何の前置きもなく、思いつくまま淡々と一連の想いを話し始めました。

1) ホラティウス『諷刺』2.2.3.

話の内容はつぎのようなことでした。「衣装の威力について考えてみる価値があります。時代によって、人は単に衣装が違っただけで大きく異なってしまいうのです。ある時代に広く行き渡っていた流行はつぎの時代の人たちによってお手本とされます。こういった人たちの存在によってある流行が代々引き継がれていきます。こんな訳で、ヘンリ7世時代の服装だっただぶだぶの突き出たコートと小ぶりの縁なし帽が、ある意味で当然といえるのですが、巧妙な考えから、今でも国王衛士たちの服装となっているのです。なぜなら、この格好をすると、背が30センチほど高く見え、肩幅も45センチほど広く見えるからです。おまけに、縁なし帽をかぶると、顔は大きく見え、従って恐く見え、宮殿の入口に立つのにより相応しくなるのです。」

「ここにいる私の先祖は、その格好をしています。もし私と同じような縁のある帽子をかぶせれば、顔の大きさは私と変わらないでしょう。この人物は、(現在はホワイトホール前の普通の通りとなっていますが) ティルト・ヤード(馬上槍試合場)で勝利した最後の人物です。²⁾ 右足のところに折れた槍が見えますが、彼は相手方の槍を粉々に砕いたのです。互いに相手をめがけて突進すると、彼は信じられない力を発揮して相手を自分の鞍の前橋に引きつけ、相手を人目にさらすというよりはむしろ名簿を読み上げるような感じで槍試合の決着をつけたのです。とはいえ、彼は勝利の活用方法を知っていたらしく、速足で物静かに(ライバル同士の)ご婦人方が陣取っている棧敷へと馬を進め、慇懃にまた尊大にならないように配慮してその相手を降ろしたのです。この槍試合が行なわれた場所がちょうど現在コーヒーハウスとなっている所かどうかは私には分かりません。³⁾」

「この先祖は武人としての才能があっただけでなく、学芸にも通じていました。この人は宮廷の他の紳士たちと同じくらいに巧みにヴィオルを弾いたのです。ご覧なさい、剣のかごつかのところにヴィオルが描かれているでし

2) 馬上槍試合は往時ホワイトホールの宴会場の正面チャリングクロス側にあった。

3) このコーヒーハウスは軍人たちに人気のあったジェニー・マンズのこと。

よう。得心なさるかも知れませんが、彼は馬上槍試合の活躍によって、当代きっての美人の侍女を獲得しました。その女性は、ほら、隣の絵に描かれています。今から三代前の祖母は、今日ではすたれていますが、当時新しく流行したペティコートをとっています。今日のご婦人方はまるで歩行器に入っているかのような歩き方をしますが、この祖母は大きなドラム罐の中に立っているように見えます。⁴⁾ この婦人は宮廷のしつけを受けていましたが、地方の優秀な妻となり、10人の子持ちとなりました。書斎を見ていただくと分かりますが、(言葉づかいの違いを考慮していただければ) 即席プディングやホワイトポット⁵⁾ では今日でも重宝されているイングランド随一の調理法を書き残しました。』

「つぎの三枚の絵は一度に見ていただく必要がありますので、もう少し下がっていただけますか。この三人は姉妹なのです。右手のとても奇麗な女性は、侍女をしているときに亡くなりました。もっと奇麗ですがその隣の女性は、彼女の意志に反して、この右手の女性と同じ宿命でした。中央の地味な女性が二人の相続分を受け取りました。彼女は策略家であり決断力のあった近隣の紳士にさらわれました。この紳士は彼女をさらっていくとき、襲い掛かるマスティフ犬を三頭毒殺し、鹿泥棒を二人殴り倒したのです。一族には災難が降りかかります。一族の財産からすると、この女性と多額の金が盗まれたことは大したことではありませんでしたが、つぎの相続人はあそこにいる優男のあの紳士だったのです。(彼の好みだったのは確かなことでしょうが) ボタンは小さく、ブーツも小ぶりで、衣服には切れ込みが入っています。机に向かって手は何か書いており、目はソネット詩人のように、あらぬ方を向いています。彼は頭が勝ち過ぎて世渡りにはうとかったのです。彼は正義

4) プランシェの『イギリス服装史』によると、老婦人は明らかにファージンゲールを着用していたということになる。ファージンゲールはスカートを広げるために用いたクジラのひげなどで作った腰まわりの張り輪のことで、16、7世紀に流行した。

5) ホワイトポットはクリーム、砂糖、米、シナモンを材料としたデヴォンシャーの料理。

感には欠けていましたが、マナーはとてもよかったのです。彼は周囲の人々みんなを台無しにしましたが、無作法なことは一度も口にすることはありませんでした。この上なく無精者の彼は、財産の半分を譲ってしまうような証書に気楽に署名をしますが、そうすることで自分の土地を守ることになるのであれば、進んで婦人の前では帽子を脱ぎました。相手の手を握り締めて言い寄ったのは彼が初めてだということです。彼が亡くなったときには1万ポンドの借金があったのですが、誰もが彼は最も紳士らしい紳士だったと言います。彼の残した借金はつぎの代には重くのしかかりましたが、血は繋がっていないのですが、家名を継ぐあそこにいるあの誠実な人物の才覚によって救われました。サー・アンドリュー・フリーポートが密かに教えてくれたのですが、この人物は先程ご覧いただいた侍女が生んだ10人の子供のうちのあの子供の子孫だということです。真相はよくは分かりませんでしたが、当時はお金に不自由していたので、その人物は見て見ぬふりをしたのです。」

ここで友人は少々まごついたようですが、私をつぎの肖像画へと案内しました。

サー・ロジャーは引き続き、つぎのような説明をしてくれました。「(私が見ている人物を指差して)この人物は私が我が家系の誉れと思っているサー・ハンフリー・ド・カヴァリです。彼は人との約束は商人のように時間を厳守し、同時に非常に寛大な心を持ち合わせた人物でした。約束を破ることは、彼にしてみると自分が破滅し、破産するのと同じ事だったのです。彼は亡くなるその日まで勲爵士として州のために尽力しました。彼は自分および親族のことで自分の身の上に義務として降りかかって来ることにも誠実に処してゆくことも決して容易なことではないと考えていました。そこで、彼は(才能は大いにあったのですが)野望のわなにさらされるに違いない公務に携わることをひどく嫌がりました。性格として際立っている点は、清廉潔白さと卓越した能力でした。彼はしばしば卓越した能力が清廉潔白さを台無しにしているのだと言っていました。そして、卓越と善良が並存しないことをしきりに嘆いていました。彼は大変な節約家でしたが、財産は一定の額

を超えないようにしていました。自分が使用する目標額が手に入った後は、それ以上のお金は長年に渡ってすべて密かに報奨金として用いました。だが、彼は怠惰に流れることはなく、かなりな高齢になるまで、自分の人生と彼にはありあまる財産を使って友人や隣人のために尽くしました。」

ここで正餐の用意が出来たとの使いが来ました。召使の後をついて行きながら、サー・ロジャーはこの紳士の説明として最後に一言、この先祖は勇敢な人物で、先の内乱ではかろうじて命拾いをしたのだと言いました。「彼はウスターの戦い⁶⁾の前日に密使として戦場に送られたのです」と彼は語ったのです。一日の違いで九死に一生を得たこと、さらには分別を備えたありさまとそれまでに聞いたさまざまな事柄を考えると、私はサー・ロジャーの飾り気のない率直な振舞いを楽しんでよいのかどうか途方に暮れるのでした。

第110号 1711年7月6日（金曜日）

【アディソン】

すべてが恐怖に包まれ、夜の静寂にさえ

恐怖を覚えた。(ウェルギリウス)¹⁾

サー・ロジャーの屋敷から少し離れたところに、昔の修道院の廃墟がありますが、そこに年数を経たニレの木が連なった長い遊歩道があります。このニレの木は高くそびえ立っていますので、その天辺にとまっているカラスは別世界で鳴いている感じがします。私はこの種の鳴き声を聞くのを非常に楽しみにしています。この鳴き声を、私はすべての被造物が欲しているものを与えて下さる、そうです、詩篇の美しい言葉を用いるなら、鳴く小ガラスに餌をお与えなさる神様への自然の祈りの言葉と考えるのです。²⁾ 亡霊が迷

6) 1651年に行なわれたこの戦いでチャールズ2世軍はクロムウェル軍に敗れ、チャールズはフランスに逃れ、内乱は終わった。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』2.755.

2) 詩篇147.9. 「食物を獣に与え、また鳴く小がらすに与えられる」

っているという不吉な噂が立っていますので、それだけ一層私は好んでこのひっそりした場所にやってくるのです。(サー・ロジャーの家で教えられたのですが) 亡霊が出るということで、この遊歩道は牧師さん以外は誰も通らないということです。かつて亡霊が頭が欠けた黒馬の姿をして現れたために従僕が気絶しかかったことがあったそうで、親切な友人である執事は私に日没後にはそこに行かないようにと真顔で助言してくれました。さらに彼は、一ヶ月ほど前に、お手伝いがその道を遅くミルクを入れた桶を頭に載せて帰ってくる途中、茂みの中からサラサラという衣擦れの音がするのを聞いて桶を落してしまったことがあったのだと付け加えました。

私は昨夜9時から10時の間にかけて散歩し、ここはなるほど亡霊が出るのに相応しい場所だなと思いました。修道院の廃墟が四方八方にあって、その廃墟はほぼ一面がツタやスイカズラでおおわれており、明るいうちはめったに姿を見せない群居しない数種類の鳥の潜伏場所となっていました。以前そこは教会の墓地だったのです。そこで、その痕跡が今でもいくつか残っています。廃墟の中ではよく反響しますので、いつもより少しでも強く足を踏み鳴らすと、その音がはねかえってくるのでした。とはいえ、時々木の天辺から聞こえて来るカラスの鳴き声がするニレの木の遊歩道は、この上なく厳粛で神聖な場所に思えます。こういった事物を前にすると、自然に物事を真剣に考えるようになります。夜になってその場所がもつ畏怖の念が強まり、あらゆる物が一層恐ろしく見え出すと、意志の弱い人なら亡霊や幻が見えてきても少しも不思議ではありません。

ロック氏は、観念が連想させるものという章で、先入観をもつことでひとつの観念が互いに似ても似付かぬことを想起させるのだということを示すためにとても面白いことを言っています。彼はいくつか例示する中で、つぎのような事例を挙げています。「悪鬼や妖精といったものは、実は光にも闇にも関係がないのだが、愚かなお手伝いが子供の心に悪鬼や妖精のことを何度も繰り返して教え込むと、子供は関係があるものになってしまう。そこで、子供はおそらく死ぬまで両者を別個のものとして考えることが出来なくなってし

まい、その後、闇がそれにまつわる恐ろしい観念を惹起するのである。その結果、その子供にとっては、両者は一緒になってしまい、どちらも耐えられなくなる。」³⁾

夕闇がありとあらゆる恐怖を与えようとしているこの寂しい場所を歩いていたとき、カラスが一羽、近くで草をついばんでいるのに気づきました。脅えやすい人ならこのカラスを見ておそらく頭のない黒い馬と考えたことでしょう。多分、気の毒な従僕は何かこの種の些細な事柄に気が動転したのだと思います。

友人のサー・ロジャーはしばしば大層陽気に私に話し掛けてくれました。話の中身としてはつぎのようなことでした。彼が初めて地所にやって来たとき、館の3箇所が全く使用されていなく、最高の部屋は亡霊が出るという噂があり、錠がおろされていたと言います。そしてまた、長いギャラリーではこれまでも物音がするというので、夜8時以降は召使を入らせることが出来なかったと言うのです。さらに、ある寝室のドアは、ある執事がそこで昔首吊り自殺をしたという噂が一家の中に流れているために釘付けにされたのです。そして、長命だった母親が、夫や息子や娘が亡くなったということで館の部屋の半分を閉ざしたということです。⁴⁾ 友人は居住空間がとても狭くなっており、ある意味では、自分が我が家から閉め出されていると感じていたので、母親が亡くなったとき、全室を開け放つように指示をだし、牧師に悪霊を追い払わせました。牧師は部屋を隈なく回り、長らく一家に巢食っていた恐怖心を追い払ったのでした。

もしこういった馬鹿げた恐怖が全国各地に広く行き渡っていなければ、これほど詳しく述べる必要はなかったのです。とはいえ、私は、古今の聖俗あわせた多くの史家が書き残した記録やあらゆる国の伝承を相容れずに、亡霊の出現を信じないで、いわれのないものだと考える人よりも、このように亡霊や幻の妄想に脅える人の方が道理をわきまえていると考えるのです。この

3) ジョン・ロック『随筆』2.33.10.

4) この慣習は18世紀末まで続いた。

ような人類の普遍的な考証に没頭できないにしても、ほかのことで信頼のできる現代の人物が述べていることには耳を傾けるべきだと考えます。この点では、史家ならびに詩人だけでなく、古代の哲学者も同様にこの意見に賛同しているのだと付け加えることが可能でしょう。

ルクレティウスは彼の哲学の方向性から見て、靈魂は肉体と分離した形では存在しないと主張せざるを得なかったのですが、彼自身は亡霊が実在していると確信しており、人は死後もしばしば姿を見せるのだと考えました。⁵⁾ これはとても注目すべき見解だと私は考えます。彼が確信を持って否定できない事実が彼の頭に非常に重くのしかかっていましたので、その事実をこの上なく不合理な哲理に反する考え方を持ち出して説明せざるを得なかったのです。肉体の表面はそれぞれの肉体からつぎつぎに絶え間なく蒸発しているのだと、そしてまた、肉体と結合しているときにはまるで玉ねぎの外皮のようにお互いを包み込んでいるのだが、この表面つまり薄い膜は、時には肉体と分離して、その完全な形を見せる、そのために私たちはしばしば、死者あるいはその場にいない人の姿や幻を見るのだ、と彼は語ります。

本日の紙面は、物語そのものというよりは、著者がそこに込めている道徳的な内省を知っていただくために、ヨセフスを取り上げている物語をひとつ紹介して締めくくりたいと考えます。⁶⁾ 彼の言葉をここに書き写します。「アルキラウス王の娘グラフィラは、初婚および再婚の二人の夫の死後、(三度目の結婚をしているのですが、三度目の夫は初婚の夫の弟で、彼女に熱烈な恋をして彼女と結婚するために前妻と分かれたという人物)、非常に奇異な夢を見た。初婚の夫が彼女に近づいて来るのが分かり、愛情を込めて抱きしめました。彼に出会えてとても喜んでいるそのとき、彼はつぎのように彼女を非難した。グラフィラ、お前は女は信用してはならないという昔からある格言

5) ルクレティウス (96?–?755B.C.) 『物の本質について』4.26ff. 宗教からの解放と死の恐怖の克服をめざす。

6) ヨセフス (37?–?100) 『ユダヤ古代誌』17.13.4–5. ヨセフスはユダヤの史家であり軍人。

を立証したのだ、純潔であるお前の夫は私ではなかったのか、私との間に子供ができたではないか、あれほど愛し合っていたのに、よくもお前は再婚、いや、三度も結婚できるものだな、それも破廉恥にも兄の臥所に忍び込む奴と、でも、過去の愛情に免じてこれ以上責めはしない、お前を永遠に私の妻にしてやる、と彼は言います。グラフィラは知り合い数名にこの夢の話をして間もなく亡くなった。私はこの物語は諸王の話をしている本書に無関係だとは考えなかった。それどころか、この例は靈魂および神の摂理の不滅を証明する確証となっているので、注目に値するのである。もしこの事実が信じられない人がいるなら、それはそれでいいが、この種の事例によって熱心に美德を心掛けている人たちの信念を掻き乱さないで戴きたいものだ。」

第111号 1711年7月7日（土曜日）

【アディソン】

アカデメイアの森で真理を探究する。（ホラティウス）¹⁾

前回の思索について考えているうちに、いつのまにか、私がいつも大きな喜びを持って瞑想にふけるテーマ、つまり、靈魂の不滅というテーマに引き込まれました。昨日、私は友人の地所の森を一人で散歩していたとき、道德の基盤であり、道理をわきまえた人物の心に惹起するすべての心地よい希望やひそかな喜びの源であるこの靈魂の不滅を立証するいくつかの主張に思いを馳せました。私は靈魂の不滅はつぎのようなことから立証されると考えた訳です。

第1に、靈魂それ自体の本質、とりわけ靈性から。靈魂の不滅にとって絶対に必要というわけではありませんが、靈性はほぼ確実に証明されているものと私は考えます。

第2に、実在を賛美し、消滅を恐れ、不滅を望む熱情から。さらに、美德

1) ホラティウス『書簡詩』2.2.45.

を実践したときに伺えるひそかな満足感や悪徳を犯したときに感じる居心地の悪さから。

第3に、正義、善、正直がすべてこの靈魂の不滅と関わりのある神の理法から。

ところで、靈魂の不滅に関わるこういった卓越した主張のひとつに、靈魂はどこまで行っても到達し得ないのだが、たえず完璧さを求めて前進して行くのだという主張があります。²⁾ この指摘は非常に重要だと思われますが、寡聞にして私はこれまであまりお目にかかったことはありません。限りなく完璧な状態に近づき、永久不滅に向かってつぎつぎに向上していくことが出来る靈魂が、生まれると間もなく無の状態になってしまうとは考えられません。この能力が無為に与えられているはずがありません。獣はまたたくまに完成されます。持てる才能はすべて2、3年すれば備わってしまい、さらに1万年生きようとも、その時点と一切変化しません。人間の靈魂がこのように行き詰まっており、能力が全開し、それ以上増大しないとしたら、靈魂は知らぬ間に衰えて行き、またたくまに消滅してしまうでしょう。しかし、造物主のみわざを知り、無限の善と叡智と力を知った後、絶え間無く向上しようと完璧さを求めて進んでいる思慮ある存在である人間の靈魂が、出発時点で消滅してしまうとは考えられないのです。

人間は、現在の状態で考慮してみますと、種の繁殖のために現世に派遣されているようにしか思われません。後継者を準備すると直ちにその後継者のために席を譲るのです。「うねりをあげる洪水で追い立てられる波のように、後継者がひしめき合っている」³⁾ のです。人生を楽しむためではなく、それを他の人に引渡すために生まれたようなものなのです。このことは動物の次元で考えてみると意外なことではありません。動物は私たち人間のために作ら

2) この考えについてはラヴジョイ『存在の大いなる輪』(ハーヴァード大学出版局、1936年) 参照。アディソンの愛読書のひとつに、ジョン・スコットの『キリストの生涯』があった。

3) ホラティウス『書簡詩』2.2.175-6.

れており、短命でその務めを果たすことが出来ます。蚕は糸を紡いだ後、卵を産んで死にます。しかし、人間は亡くなるまでにすべての知識を取り入れることは出来ませんし、熱情を抑え、美德に包まれた靈魂を確立し、本来の完璧な状態に達する時間はありません。無限の叡智を備えた神がこれほどつまらない目的のために誉れある創造物を造られるのでしょうか。神はこういった実を結ばない靈的存在や短命に終わる理性的な存在を造るだけで満足出来るのでしょうか。神は私たちに才能や能力を授けられてもそれが発揮できず満たされないままにしておかれるのでしょうか。神が人間をお造りになれるときにさまざまなみわざを発揮なさいましたが、その中でも燦然と輝く叡智はどうなっているのでしょうか。現世は来世のための単なる苗床であって、矢継ぎ早に入退場を繰り返す道理をわきまえた人間は、現世では存在の最初の萌芽を受け止めるだけで、後から枝葉をつけ永久不滅に花開くもっと素敵な土地に移植されるはずなのです。

信仰ということを考えるときには、私の考えでは、靈魂はどこまでも行っても到達し得ないのですが、絶えず本来の完璧な状態を求めて歩み続けるといった考えほど心地よく、また、立派なものはないと思います。靈魂は力から力に進み、⁴⁾ 常に新たな栄光を獲得し、その輝きは永久不滅なのです。靈魂は、絶え間なく、美德に美德を、知識に知識を添えているのであって、人が生まれながらにして持っている向上心を実に好ましいものにしてくれる訳です。それどころか、神ご自身にとっても、ご自身の創造物が絶えず美しくなっていき、一段とご自身に似通って来るありさまをご覧になることは、好ましい光景であるに違いありません。

劣った者にみられる妬みや優れた者にみられる侮蔑の心を一掃するには、限りのある精神は完璧を求めて進んでいるのだという一点だけ考えればそれで十分だと私には思えます。人間の靈魂にとって神のような存在として登場する智天使は、永久不滅の段階は人間の靈魂が自分自身と同じくらいに完璧

4) 詩篇84.7.「彼らは力から力に進み、シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう」

な状態になったときに初めて達成されるのだということがよく分かっています。そうです、靈魂がその完璧さの度合いを見下してしまいますと、その分だけ完璧さには到達し得なくなるのです。優位に立つ者がさらに歩み続けることで、神のものさしから見て距離を保ち、優位性を維持するのは確かですが、現在確保している位置がどれほど高位であっても、下位にいる者が最後にはその地位までのぼりつめて同じような栄光に包まれて輝き出すのだということが分かっています。

靈魂をのぞいてみると驚きと尊敬の念に包まれるでしょう。そこには完璧さを求めるための涸れることのない源泉である美德と知識が密かに貯えられているのです。私たちには自分たちにいかなる将来が控えているかは分かりませんし、また常に自分のために取っておかれている栄光をつかめるかどうかも分かりません。神とともに考慮される靈魂というものは、ちょうど平行線のようなものなのです。互いに永久不滅に向かって近づくのですが、決して交わることはありません。そして、このようにして完璧さだけでなく幸福の規範である神に絶え間なく向かっている我々自身の姿を考えることによって忘我の境地に入ることが可能となります。

第112号 1711年7月9日(月曜日)

【アディソン】

まず最初に神々に敬意を表し、

最も崇高でかつ最も重要な法を守る。(ピタゴラス)¹⁾

私は田舎の日曜日には常々大いに満足しています。そして、第七日目を聖なる日にしておくことが人間にだけ見られる慣行だとすると、これは人間を洗練し教化するために考えられる最良の方法だと私は思います。村の人々全員が、最高の表情を浮かべ、こざっぱりした衣服をまとって欠かさず定まっ

1) ピタゴラス『黄金律』1-2.

た時間にやって来て、お互いに取り止めのないことを語り合い、礼拝式のお勤めに耳を傾け、みんなして神を崇めるといったことがなかったら、田舎の人々はまたたくまに粗野で野蛮になってしまうのは確実です。日曜日は一週間のあかを洗い落としてくれます。日曜日は人々の信仰に対する気持ちを喚起するだけでなく、男性も女性もともにとても好ましい形で姿を見せ、みんなの前であらゆる資質を発揮することになります。一般に教区の出来事はすべて説教が終わった後かベルの鳴る前にそこで話し合われますので、ちょうど取引所における市民と同様に、田舎の人は教会の境内で名をあげるのです。

信仰心にあつい友人のサー・ロジャーは、教会の内部を自分が選んだいくつかの聖句で飾り立てています。²⁾ また彼は説教壇のクロスを寄付し、聖餐台も身銭を切って設置しています。³⁾ 彼がしばしば口にするのですが、彼が領地にやってきた当初は、教区民が全員教会に揃うことはなかったそうです。そこで彼は、みんなが集まり膝まずいて唱和させるために、教区民全員に膝ふとんと祈禱書を配ったということです。同時に、彼は巡回の聖歌隊指揮者を雇って教区民たちに賛美歌の正しい歌い方を教えさせたということです。今では教区民たちは自分たちの歌う賛美歌を大いに誇りにしていますし、確かに彼らの賛美歌は私がこれまでに聞いたどの教会の賛美歌にもまさっています。

会衆全員の主人であるサー・ロジャーは、みんなに秩序を守らせ、誰も居眠りさせません。説教の間に、つい束の間眠気に襲われた場合でも、それに気づくと彼は立ち上がって周囲を見回し、こっくりしている人を見掛けると、彼自身がその人を起こしたり、召使に起こしに行かせたりするのです。そのほかにも、老勲爵士の几帳面さが発揮される場面がいくつかあります。彼は

2) 教会法規82条では、「すべての教会、礼拝堂の東の端には、十戒およびその他聖句をいくつか示し、人々の目に留まり、読めるようにしておくこと」となっていた。

3) 当時、とりわけ17世紀初頭には、聖餐台は必ずしも内陣にあるというわけではなかった。

会衆が賛美歌を歌い終わった後30秒ほど歌を引き延ばすことがあります。そしてまた、礼拝に気分をよくしたときなどは、ひとつのお祈りのことばの後でアーメンを三度も四度も繰り返すことがありますし、みんなが膝まずいているときに立ち上がって、参列者の数を数えたり、店子の誰が来ていないか確かめたりします。

昨日のことですが、礼拝の途中で友人がジョン・マシューズという人物に向かって、何をしているのだ、みんなの邪魔をしてはいけない、と大きな声を出しているのを聞いてとても驚きました。このジョン・マシューズは名うてのだからしない人物のようで、退屈凌ぎに足を踏み鳴らしていたようです。サー・ロジャーのこういった権威は、暮らしのさまざまな場面で風変わりな形で発揮されるのですが、教区全体に非常にいい結果をもたらします。教区民はさほど洗練されてはいなく、彼の振舞いにどこかおかしい点があるとは思いません。また、彼に備わっている分別と徳のお陰で、友人たちは彼のこのような取るに足らない風変わりな点は汚点というよりはむしろ彼の人間性を引き立てていると見ています。

説教が終わっても、サー・ロジャーが教会から出て行くまでは誰ひとり席を立とうとはしません。勲爵士は内陣にある座席から立ちあがって、二列になって両側でお辞儀をしている店子たちの間を歩いて出て行きます。そして時々、教会で顔を見掛けられない妻や母親や息子や父親はどうしているのかと尋ねます。これは欠席している人物に対するそれとない叱責と理解されています。

礼拝堂付き牧師がしばしば口にするのですが、教理問答の行なわれる日には、サー・ロジャーは上手に答えた少年に満足すると、その少年を励ますために翌日聖書をあげるようにと指示を出したり、時にはその母親のために、薫製にした塩漬けのわき腹肉のベーコンを添えてやるということです。同様に、サー・ロジャーは教会の書記には年5ポンド加増しているとのことでした。⁴⁾ また、彼は若い人たちに祈禱書を完全にマスターさせようとして、高齢になっている現在の牧師が亡くなったら、功績次第ではその地位を授けてあ

げると約束しているそうです。

サー・ロジャーとこの礼拝堂付き牧師との間に伺える相互理解と力を合せて善い事を行なおうとする姿勢には目を見張るものがあります。というのも、隣村では、教区牧師と郷土の間には意見の違いがあって絶えず言い争っているからです。教区牧師は終始郷土にお説教をしており、郷土は郷土で腹いせで教会には出向かないのです。郷土は店子たち全員を無神論者にしてしまい、十分の一税は脱税させています。一方、教区牧師は毎週日曜日には、村民たちに牧師の威厳を話して聞かせ、郷土よりも自分の方が優れた人物だとはのめかします。要するに、両者の関係はこのようにどうしようもない状態になっていますので、郷土はこの半年間人前でも内々でも一度もお祈りしたことはありません。また、牧師は、郷土が態度を改めないのなら、全会衆を前にして彼のことを神に告白しなければならないと威嚇します。

この種の反目はよくあることですが、庶民にとってはとても不運なことです。常々富に眩惑されている彼らは、学識者と貴顕の士の分別にそれぞれ同じだけの敬意を払います。そこで、彼らは、自分たちに説教される真理がどれほど大切なことであっても、それを信じない人が年に五百人かそこいらいると分かると、それを真理とは思わなくなってしまうのです。

第113号 1711年7月10日（火曜日）

【スティール】

彼女の心に刻まれた彼の言葉、彼の容貌が、
熱情をかきたて、苦悩を増大させる。(ウェルギリウス)¹⁾

私の交友関係について最初にお話したときに、友人のサー・ロジャーが若い頃に経験した大きな苦悩について触れたのを思い出します。その苦悩は恋

4) 故サイクス執事によると、副牧師の給金は大体20ポンドから30ポンドだったので、書記は平均5ポンドか7ポンド程度だったであろうということである。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』4.4.

に対する失望にほかなりませんでした。今日の夕方、たまたまサー・ロジャーの館から少し離れたところにあるとても心地よい遊歩道にさしかかった時のことでした。その遊歩道に足を踏み入れると直ぐに、善良な友人は笑みを浮かべて辺りを見回しながら、「強情な寡婦が手に入れたのと同じように、²⁾ 私にひどい仕打ちをした女性に領地を分与してやれないが、この遊歩道の木の枝を見ていると、彼女のことそして彼女の厳しい仕打ちが思い出されて仕方ないのです。彼女の手がこの世で最も美しいのは間違いのないところでしょう。この遊歩道で私はいつも彼女のことに想いを馳せていたのです。そのため、ここにやって来ると必ず、私の心には、実際に彼女とこの木陰を歩いていたときのあの優しい気持ちが蘇ってくるのです。私は愚かにもこの木々の樹皮に彼女の名前を刻みました。恋する男の状態はあまりにも不幸なものですので、熱情を振り払おうと苦しんでも、それをさらに深く刻み込んでしまうことになってしまうだけなのです。彼女の手がこの世で最も美しいのは間違いのないところでしょう。」と語りました。

そういうと、しばらく沈黙が続きました。友人がこれまで巧みに避けてきた話題にこれほど自然に入っていくのに気づいて私は嬉しく思いました。随分沈黙が続いた後、彼は再び人生のこの大変な出来事について話し始めました。このときの様子は、私がこれまで彼に対して抱いていた印象とは違ったものでした。この打撃がその後の彼の言動に影響を与えたのです。それ以前は彼は快活な人物だったのです。彼はつぎのように続けました。

-
- 2) この人物のモデルと思われるキャサリン・ブーヴィ夫人は、夫ウィリアム・ブーヴィの死によって1692年22歳で寡婦となった。彼女はグロスター近郊のフラクスリーの屋敷に隠棲し、友人であるトゥイッケナムのメアリ・ポウブ夫人と一緒に宗教活動、慈善活動に身を捧げた。彼女は読書家で博識との評判があった。スティールは彼女に『婦人の蔵書』第2巻を献呈した。また、彼女は寡婦産をめぐる訴訟に巻き込まれたが、勝訴し、1726年1月31日に亡くなるまでフラクスリーで暮らした。スティールもアディソンも彼女を訪問したことがあると言われており、そこにある歩廊は長い間「アディソンの散歩道」として知られていた。

「私が領地にやって来たのは22歳のときでした。地域の住民への親切なものでなしと良好な関係という点では私の名誉のために、そして田舎での気晴らしという点では私の健康のために、この地にこれまで住んできた立派な先祖のやり方を踏襲することになりました。23歳のときに、州長官の役を仰せつかりました。召使や供回りのものたちは、(自分の容姿をまんざらでもないと思っていた) 若者の意を汲み、人前で私を引き立てたのでした。その時の私の姿は容易に想像できることでしょう。背もそこそこあり、馬の御し方も巧みで、きちんとした装いをした私は、州の長官として、楽隊を率い、帽子には羽飾りをつけ、訓練の行き届いた馬に跨っていたのです。言っておきますが、巡回裁判が開かれる場所に向かっているときに投げ掛けられる随所のバルコニーや窓からの視線に私は少なからぬ満足感を覚えたのです。法廷についてみると、そこには寡婦の身なりをした美人が控えており、寡婦産の申し立ての成り行きを聞こうとしていたのです。この存在感のある女性は、(彼女は生まれながらにして出会う人みんなを虜にしてしまう人だったのですが) 顔にはあきらめの表情を浮かべており、法廷にいる人たち誰もがなんとなく落ち着かない様子でひそひそとささやきあっていました。彼女は周囲を見回し、みんなが自分に取りつかれたように、物欲しげな視線を投げ掛けているのを知ってとてもまごつき、私の方を見て魅惑的な眼差しを浮かべるのです。彼女から見つめられると、私はまるであわてふためいた間抜けのようにお辞儀をしているのでした。そもそも彼女の申し立てを審議しなくてはならないのだと思い直して、私は捕らわれの子牛のごとく声を発し、被告人側の証言を促します。私がにわかにえこひいきしたために、州の人たち誰もが長官もまた美貌の寡婦の虜になったのだと考えました。彼女の申し立てが公判に付されている間、確かに彼女は非常に真剣に振舞い、機会を捉えて弁護人に手紙を差し出しました。そして、彼女は大勢が見守る中で振舞うことに相当当惑していました。実は、私だけでなく法廷にいる人たち全員が彼女の味方をしたのです。そこで、彼女の夫側の相続人が主張したことはすべて根拠がなく取るに足らないことだとみなされ、彼女側の弁護人が応答する場面になると、

誰もが彼女に有利になると考えていましたので、弁護人が主張する必要はほとんどありませんでした。前もって言うておかなくてはなりませんが、この強情な女性は、男性の賞賛を密かに喜びますが、それ以上には進展しない得体の知れない女性なのです。このため、彼女は愛慕者を何名も従えています。そして、季節によって町の愛慕者から田舎の愛慕者へと渡り歩きます。彼女は読書好きで、友との交わりをこの上なく楽しみとしています。彼女は常に親友をひとり連れていきます。この親友は彼女が日々口にしていく男性への異議申し立ての証人であり、彼女自身の処世訓から、彼女が恋に一步踏み込むときの関所となっています。

とはいえ、是非とも言うておかなくてはなりませんが、この海千山千の女性は、私のことは特別扱いをしてくれ、田舎には獣じみた人たちが沢山いますが、サー・ロジャー・ド・カヴァリが一番おとなしく思いやりがある方だと明言しているとのこと。私をからかってやろうと思っている人からその話を聞いたので、心もとない次第ですが、私は嫌われてはいないのだということに気を良くして、お仕着せを新調し、馬車の馬も2頭新たに手に入れ、町ではみをふくませ、足の運びを訓練させました。そしてその後で、馬車に乗って彼女を訪ねることにしたのです。従者たちが私の富と若さに相応しいことを確信すると直ぐに、私は挨拶に出掛けました。この婦人は絶えず希望を燃え上がらせ、敬意を喚起させる特殊技能を備えています。彼女はこの技能に習熟するために、功德を得た人たちに劣らないほどの知識や機知や良識を身につけているのです。そのうえ、彼女は信じられないほどの美貌の持ち主です。かりにある策略を駆使する場合にでも、眼差しと美の力に頼らないくても、彼女は真の魅力で武装し、欲望の代わりに賞賛の念を引き起こさせます。彼女のすべてを見ると、確実に、容貌には威厳が、所作には落ち着きが、物腰には充足感が漂っています。また、彼女の姿態が望みを抱かせるとしますと、彼女の美点が懸念を抱かせるのも確かです。繰り返しになりますが、彼女はとても学のある人なので、彼女に近づく田舎の紳士は誰もがからかいの対象とされてしまいます。実は私が彼女の家を訪問したとき、私

はとても礼儀正しく迎え入れられました。と同時に、彼女は（絵のモデルとでも言えるような）姿勢をとっていましたので、期せずしてそこには新たな魅力が漂っていました。私はやっと彼女の前に来たものの、畏敬の念にうたれてしまい口がきけなくなったのです。彼女は素早くそれを察知し、そこにつけ込み、私に向かって、愛と名誉に関しては共にそのふりをしているだけの人もいるし、真に心酔している人もいるのだと語りだしました。彼女はひょっとするとヨーロッパで最も優れた哲学者にも匹敵するくらいの学識があるのではないかと私は思っていますが、彼女はあれこれ論じた後、私の意見を求めました。彼女の傍には親友が控えていましたが、私が狼狽して黙っているのに気づくと、この意地の悪い副官役は彼女に向かって、サー・ロジャーは思案なさっておられるのであって、いつお考えを述べようかとその頃合いを探っておられるご様子はとても喜ばしいことだと語ります。二人共平然としているのです。私はこのような意味深な詭弁を聞かされ半時間ほどどのように振舞うべきか熟考した後、席を立てて暇乞いをしました。そのとき以来幾度となく彼女と顔を会わす機会がありましたが、彼女はその都度私の理解できないことを話題にするのです。私の目にとまった最高の美人から、私はこの残酷な仕打ちによって遠ざけられたのです。彼女は他の人たちにも同じような振舞いをします。彼女に言い寄るには、スフィンクスを攻略するときのように、彼女をまごつかせなくてはなりません。もし彼女が他の女性たちと同じような振舞いをする人であって、何か話し掛けることができるなら、その喜びはいつまでも続くに違いありません。だが、いかんせん彼女の心は何か別のことに向けられているのです。確かな筋から耳にしたことなのですが、つぎのような話をどのように解釈したらいいのでしょうか。彼女は私に話し掛けてからというもの、手を胸に当て、襟飾りの歪みを整えたのです。そして、私が真剣に見つめていると彼女は視線を落したのです。彼女は普通に話しているときにも言うに言われぬほど甘美な声の持ち主なのですが、実に歌が得意だということです。是非とも聞いて欲しいのですが、私は彼女と初めて会った翌日、彼女と宴席を共にする機会を持ちました。すると、彼

女は田舎の紳士諸士が見ている前で私にタンジー³⁾をよそってくれたのです。本当に彼女の手は言葉では言い尽くせないほど奇麗でした。誰でも彼女を一目見たら同じ気持ちになるのは間違いありません。彼女の話し振りは快い調べであり、彼女の姿態は天使さながらだからです。彼女のことを話しているときには、私の精神状態は異常になっているのは分かっていますが、実際のところあのような申し分のない理想的な女性を前にして平気でいられるのは愚か者の証拠なのです。嗚呼、なんと素敵な女性だろう。彼女は類まれな女性であって、男性は誰ひとり近寄りがたい存在なのです。

私はサー・ロジャーがうわ言を言い始めているのが分かりました。そして別の人たちと会うことになっている館に向かっている感覚がなくなっていました。そこで私は友人の話にあれこれ矛盾点があったのはこの寡婦に原因があるのだと納得しました。彼はとても自制心がある人物で、あからさまに彼女の話を話には出さないのですが、マルティアリスによると、英語でうまく表現できませんが、「口を開くと彼女のことばかり」ということになります。本日の締めくくりとして、マルティアリスの警句を引きたいと思います。これは誠実な私の友人の状態を見事に言い当てています。

泣いているときも、喜んでいるときも、立ち上がっているときも、
座っているときも、歩いているときも、ルーフスが
口にすることといえば、ナエヴィアのことばかり。
食べているときも、飲んでいるときも、疑問を差し挟むときも、
議論するときも、ナエヴィアのことを口にするか、
黙っているかのどちらかだ。
父親に手紙をしたためても、最後の一行は、
我が愛しのナエヴィア、僕は永遠に君のものだ、
となってしまうのです。⁴⁾

3) 第38号参照。

4) マルティアリス『警句』1.68.1-6.

第114号 1711年7月11日（水曜日）

【スティール】

貧しさに伴う恥辱と不安。（ホラティウス）¹⁾

儉約というものは、育ちの良さが社交生活に及ぼすのと同じ効果を、私たちの身代にもたらしめます。双方とも、うわべだけの振る舞いというものがあります。うわべだけを飾ると、敬われるどころか、逆にみじめで見下げられた存在になってしまいます。昨日、サー・ロジャーの知り合いの紳士諸士と会食を共にし、残った人たちで、食後、酒を酌み交わしました。私は特にかなり立派な容貌をした人物に目が行きました。彼は他の誰よりも酒には目がないように見えました。だが、私には彼が酒を喜んで飲んでいるとは思えませんでした。彼は、一杯入ると、どんな話にも疑わしげな表情を浮かべました。そしてさらに酔いがまわって来ると、機嫌はさらにひどくなりました。彼が辛辣になっているのは、その場にいる誰かを嫌悪しているからというよりはむしろ自分自身の内面にあるなんらかの不満に原因があるようでした。彼の名前を聞いて、彼がこの地方の相当な資産家であるが、多額の借金も抱えている紳士であることが分かりました。このみじめな人物を不機嫌にしている原因は、不動産が抵当に入っており、金利に縛られているからなのです。それでも彼は不動産の一部を売却する気持はないのです。彼は、夜な夜な眠れなくても、絶えず不安に駆られても、侮辱の脅威があっても、また、数知れない不便さに巻き込まれようとも、一般に考えられているよりも資産は少ないのだと言われるのを嫌うために、彼の高慢な食欲が壞疽を抱え込んでいる訳です。つまり、彼はさほど豊かではないという評判を呼びたくないのに、貧しさの苦痛に耐えている訳です。彼の屋敷を訪れてみると、食卓には食べ物かふんだんに出てきますが、供され方にはすべて不自然な感じが漂い、しかも主人の心には安らぎはありません。あらゆることにある種の無駄とぞんざ

1) ホラティウス『書簡詩』1.18.24.

いさが伺え、すべてが貧しく困っている状態を覆い隠しているだけに過ぎません。友人サー・ロジャーの家の食卓にある整然としたところや心地よさが欠けています。彼の周辺では、それは放蕩にすりかえられているのです。

この紳士の振る舞いはごく一般的なやり方ではあるものの、指揮下に部下はほとんどいないにもかかわらず、小さな峠ではなく広い範囲を預っている将校の振る舞いと同様に滑稽なものです。借金を払い、役を演じ、実際より広い不動産を思いのままにしようとすることは、虚栄の中でも最も許し難いものであり、気がとがめている当の本人を結局は屈辱的な状態に引きずり込むに違いありません。だが、グレートブリテンを見回してみますと、こんな致命的な過ちを犯している人の例にはことかきません。これは最初は穏便な呼ばれ方をされ、一時的な恥辱ですみませんが、相容れない振る舞いはやがて振りをしているその状態にまで進行してしまいます。

レアティーズには年1500ポンドの収入がありますが、6000ポンドの抵当に入っています。彼に借金を全額支払えるだけ土地を売却したら、1ポンドにつき地租が4シリング浮くのだと説得することはできません。彼は地主であるという虚栄を捨てることができないのです。もしレアティーズが土地を売却すれば、彼はおそらくもっとゆったりとした気持ちで暮らせるでしょう。ところで、昨日の仲間のアイラスは、収入は年1200ポンドしかありませんが、彼もまたレアティーズと同類です。レアティーズは土地を売却して借金を返済するどころか、生まれの良い乞食を世の中に送り出します。1年ごとに子供が生まれると少なくとも地代の1年分が消えていきます。

レアティーズとアイラスは似たもの同士で、互いにその暮らしを不快に思っています。アイラスは貧しさへの不安に、ラティーズは貧しさへの恥辱に掻き立てられます。両者の行動の動機は非常に似通っていますが、「双方にとって、貧しさは最大の悪ですが、その振る舞いは大きく異なっている」と言えます。レアティーズは貧しさへの恥辱があるために、不必要な供回りを付け、無駄な出費をし、気前の良いもてなしをします。一方、アイラスは貧しさへの不安があるために、質素な暮らしをし、召使をつけず、収穫物を売り、

農夫の監視をし、自分も野良仕事をします。貧しさへの恥辱をもつレアティーズは日一日その状態に近づいていきます。そして、アイラスもまた同様です。

こういった動機を持つと、あらゆることにだらしなくなって、気がとがめる行き過ぎた行為を生むことになります。高利貸しや投機や無理強いや圧制といったものに走るのは、貧困を恐れる気持ちにその原因があります。同時に、貧困を恥じる気持は、虚栄とか放縱とか浪費を生み出します。このような行き過ぎた行為はいずれも、理性のある人物にとって相応しいものではありません。道理をわきまえた人物として必要なものだけを手に入れるように取り計らうと、余分なものまで手に入れようとすることは、当然、必需品を看過することと同様に、過度の悪徳となります。

理性と分別に従うと、以上のことは自然の理法から外れているのは確かなところです。こういった考えに立って、私はいつもカウリー氏の著作を読むのを大きな喜びとしています。²⁾ 彼の悟性はいうまでもなく、雅量は他の著者を凌いでいます。著作を発表したこの高雅な著者に宿っている真に際立った精神は、多分に沈着な知性と欲望をあらわにしないで中庸を重んじる彼の生き方から生まれているのです。このため彼は友人には受けが良く、また、声望があります。貧困の顔つきをした人の生活状態は、カウリー氏の偉大な俗人によって見事に描写されています。³⁾ 彼が当代きっての博学者との評判を確立し、人々の通常の営みについて述べる彼の考えを説得力のあるものになっているのは、欲望に対して彼と同じような考えをする人々にとって大きな満足となります。

先日触れましたサー・ロジャーの先祖にならって、すべての人が限度額を自分自身に言い聞かせておくなら、これは素晴らしい人生訓になるものと思

2) エイブラハム・カウリー (1618-67) 英国の詩人・随筆家、1668年に著作集が出版された。

3) カウリーはエッセイ「偉大さについて」の結末にホラティウスの『頌詩』を真似た詩行を載せた。

われます。こうすることによって、うまくその手前で留まり安定した生活を送るか、限度額を越えたものは自らの喜びの種にするのではなく、もっと崇高なもののための使用に切り替えることができるでしょう。こういった気質を持つと、自分より優る不安な人たちに無知な妬みを買うこともなく、自分よりも劣る幸せな人たちに許し難い侮りを招くこともありません。そうすると、一定の羅針盤に基づいて、一定の目的を持って人生の航海をすることになります。だがしかし、これから先の利得をあてにしていづもうろたえ、起りそうもない将来の不幸に備えて不必要な防具を身につけることは、方向性に対する判断力を欠き、斟酌するに値しない評価を落すことに執心する一種の後天的な本能に振り回される機械的な人間となってしまいます。おそらく私が現在サー・ロジャーの館で享受している静穏さが、憂き世ばなれしたこういった思考を生み出したのかも知れません。私は今、美しい風景に囲まれた快適なあずまやにいますが、このまま滞在を続け、これみよがしの人生舞台から隔絶する積りはありません。ただ現在は人生を達観しており、本日の締めくくりとしてカウリー氏のつぎの一節を引用する心の余裕があるのです。

かりに野心に取りつかれ、偉大になりたいという願望が
巢食うのだったら、どうか、私から私が愛する慎ましい
祝福を取り除いて下さい。⁴⁾

第115号 1711年7月12日(木曜日)

【アディソン】

願わくは、健全なる身体に健全なる精神を。(ユヴェナリス)¹⁾

身体の労働には、生計を得るためにするものと、楽しみのためにするものと二種類あります。後者の場合は、一般に労働という名前は運動という名

4) 「偉大さについて」の冒頭部分。

1) ユヴェナリス『諷刺』10.356.

前に置き換えられ、動機が別ですので普通の労働とは異なります。

田舎の生活にはこの二種類の労働がふんだんにあります。従って、ほかの暮らし方をするよりは、はるかに健康的で、快適なものとなります。私は身体というものは精神の働きを潤滑にさせるために実に見事に機能している管状器官と腺、もっとくだけた言い方をしますと、管と濾過器の集まりだと考えています。これには臓腑、骨、腱、静脈、神経、動脈だけでなく、目にみえない腺つまり濾過器の周囲にからみ合っている無数の目にみえない管状器官つまり管の繊維の組合わせである筋や帯が含まれます。

人体がこのようなものだと考えますと、解剖学上の細かな点を考慮しなくても、これを健全な状態に保っておくためには、身体を動かすことがどれほど大切であるかが分かります。身体を組み立てている無数の管や濾過器を清浄に保ち、器官をいつまでもしっかり活動できる状態に保つことは言うまでもなく、体内の分泌液を混ぜ合わせ、消化し、分解するためには、頻繁に身体を動かす必要があります。労働あるいは運動によって、体液は攪拌され、それぞれ相応しい導管に流れ込み、余分なものは廃棄され、うまく体内に振り分けられます。これがないと、活力は湧きませんし、精神は活発に機能しません。

本日は、身体が心的能力全般に及ぼす影響について考えて見たいと思います。精神と身体が手を組んではじめて、悟性は明晰さを保ち、想像力はかき乱されず、知的能力を適切に発揮するために必要な心意気に磨きがかかります。女性がしばしば陥りがちな気ふさぎもそうですが、勉強が好きで坐業をする人たちによく見られる不機嫌も運動を軽視するからだと言わざるを得ません。

私たちの身体を満足のいく状態に保つために運動をする必要が全くないとすれば、造物主は上述の管状器官や腺を保護するために必要な伸縮やねじりや膨張を引き起こせるように、四肢が自由に動いたり、各部位が柔らかくなるような身体にはお造りにならなかったことでしょう。体調を調えるための適当な運動をするには改めて特別なことは必要ないかも知れませんが、私た

ちは身体を動かさなければ、何一つ貴重なものは手に入らないようになって
いるのです。富とか名誉は言うまでもなく、食物や衣服までも額に汗して働
かなくは手に入れることは出来ません。神は必要な物を揃えてくださいま
すが、自分たちの力でつかみとる必要があるのです。大地から農産物を産み
出すには、その前に大地を耕さなくてはなりません。そしてその産物を実際
に消費できるようにするには、多くの人たちの手を経なければなりません。
製造業、商業、農業に従事するには、当然身体全体を使う必要があります。
社会的境遇から労働の義務を負わない人々は、運動という名の自発的な労働
に携わらないと、他の人たちより悲惨な結果を招きます。

私の友人サー・ロジャーはこの種の運動に疲れを知らない人物で、屋敷の
あちこちにこれまでの成果をつるしています。大広間の壁面には、彼が狩猟
で射止めた鹿数種類の角を飾っています。彼はこれを屋敷で最も貴重な調度
品と考えており、しばしば話題に昇らせ、自分が暇を持て余してはいない証
しとします。広間の隅には、干し草を詰めた大きなカワウソの剥製がありま
す。これは彼の母親がそうするように指示したということですが、サー・ロ
ジャーはこれを眺めるときにはとても満足げな表情を浮かべます。というの
は、彼が犬を仕掛けたのはわずか9歳のときのことだったのですから。広間
の隣の小部屋は、さまざまな銃と細工物が置いてある一種の武器庫となっ
ています。彼はこの武器を使って森で大活躍し、キジやヤマウズラやヤマシギ
を数え切れないほど射止めたのです。厩舎の入口には彼が追い詰めたキツネ
の頭部がいくつか飾られています。サー・ロジャーは私にその中で特別に真
鍮の釘で打ち付けているものについて説明をしてくれました。これは馬で約
15時間追い、州は六つにまたがり、去勢馬一對と犬を半数以上犠牲にしたと
いうことでした。サー・ロジャーはこれを彼の人生最大の手柄と見なしてい
ます。先日話題にしましたつむじ曲がりの寡婦のせいで、キツネが数頭犠牲
になりました。²⁾ サー・ロジャーによると、恋をしている間、厩舎の西側のド

2) 第113号参照。

アにキツネを打ち付けたということです。この寡婦に邪険にされるといつもその代償をキツネに求めたのです。寡婦への情熱が和らぎ、年齢が進むにつれて、彼はキツネ狩りをやめました。現在でもまだ、彼の屋敷から10マイル以内に生息する野ウサギは安泰ではありません。

我が読者諸兄諸姉にお勧めする運動としましては、乗馬にまさるものはないと思います。私の考えでは、乗馬ほど健康を増進し、同時に、あらゆる点から身体に適応しているものは他にはありません。シドナム博士も盛んに乗馬を推奨しています。³⁾ 読者の中で、乗馬の力学的な効果について詳しくお知りになりたい方がいらっしゃれば、先年『体育治療術』というタイトルで出版された書物をご覧戴きたいと思います。⁴⁾ 私自身のことをお話致しますと、私はそういった機会に恵まれない町で生活をしていますので、部屋の片隅に置いているダンベルで毎朝1時間ばかり運動をします。⁵⁾ このダンベルはとにかく黙ったまま出来ますので、私はとても気に入っています。下宿の女主人も娘さんたちも私が運動する時間のことはよく承知していますので、その間は決して部屋には入って来ません。

今よりもっと若い数年前までは、大変な博識でもって著わされた古代ローマの運動に関する論文で知ったもっと激しい運動をしていました。⁶⁾ これは「自分の影との闘い」というもので、先に鉛が詰まった短い棒を1本ずつ手にしてそれを振り回すのです。この運動をすることで、胸部は広がり、四肢を動かす必要があります、ちょうど打撃は受けないボクシングをしているような快感があります。私は無駄なことで論争に時間を浪費している学識者たちは、

3) シドナム博士については、第25号参照。

4) フランシス・フラー『体育治療術』(1705)。

5) 現代的な意味でのダンベルではなく、鐘のついていない教会の鐘を振り回すような器具。この種のダンベルは17世紀前半ごろから用いられていたようである。

6) ヒエロニモス・メルクリアリス「体育術について」は、1569年にヴェニスで初版がでて、その後増刷された。古代ローマでも同じような運動が行なわれていたことが分かる。

そんなことをしないで直ちにこの自分の影との闘いを取り入れればいいと思います。そうすれば憂鬱な気分は消え失せ、自分だけでなく周りの人たちも快適な生活が出来ます。

結論としましては、私は精神と身体から成り立っていますので、自分には二つの務めがあると考えています。そこで、一日沈思黙考だけして運動をしなかったり、またその逆であったりすると、その日の務めはまだ終わっていないと思うのです。